

＜株式会社エフエム東京 第 524 回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和 7 年 12 月 2 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 11 階大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル委員長	佐々木 俊 尚 委員
松 田 紀 子 委員	山 口 真 由 委員
柴 崎 友 香 委員	福 里 真 一 委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（6 名）

唐島 夏生	代表取締役社長執行役員
内藤 博志	取締役執行役員コンテンツ事業局長
宮野 潤一	執行役員編成制作局長
砂井 博文	編成制作局制作部長
蘭 有紀子	編成制作局編成部長
岡田 啓輔	編成制作局編成部プロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 宮野放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴 （55 分）
『TOKYO FM 特別番組 渋谷陽一 追悼～音楽が終わった後に』
2025 年 11 月 24 日（月・休）16:00～16:50 TOKYO FM

《議事内容》

議題 1: 最近の活動について

■2025 年 10 月度 聴取率調査結果

ビデオリサーチ 2025 年 10 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査(2025 年 10 月 20 日～26 日)において、以下のとおり、主要 3 区分において以下の結果となりました。

- ・男女 18～49 歳 : 在京 2 位 (同率) ※ニッポン放送が単独首位
- ・男女 12～59 歳 : 在京 2 位 (同率) ※ニッポン放送が単独首位
- ・男女 12～69 歳 : 在京 2 位 (単独) ※ニッポン放送が単独首位

今回の調査では主要区分いずれも前回比で 1 ポイント下降し、個人全体区分ではこれまで 21 期(22 年 4 月以来 3 年半)にわたり継続してきた首位を明け渡す形になり、在京ラジオ第 2 位という結果となりました。前回好調だった 50～60 代男性層や、コアターゲット層の 30～40 代女性層において、リーチや聴取分数の減少があったことに起因しています。この結果を踏まえ、改めて接触のきっかけを増やし、より長く聴かれるための演出面の再検証など、次回 12 月度調査に向けて挽回を図ります。

■新番組『パペットスンスンの DJ SUNSUN』スタート

2025 年 12 月 6 月(土)から毎週土曜・日曜 12:55～13:00 に新番組『パペットスンスンの DJ SUNSUN』をスタートします。パペットスンスンとは、青いパペットのキャラクターで SNS を中心に人気を博し、総フォロワー数は 250 万超え、グッズを販売するポップアップショップは連日の行列、企業コラボが続々と話題を呼ぶなど、話題沸騰の人気キャラクターです。この夏からは、フジテレビ系列「めざましテレビ」にてミニコーナーもスタートしています。そのパペットスンスンが初めてラジオにチャレンジする新番組として、12 月より毎週土曜・日曜に 5 分番組がスタートします。11 月 26 日の情報解禁後、告知動画は 170 万回強再生、番組宛のメッセージは 1 日で 1500 通を超えるなど注目を集めています。今後はグッズ販売など番組と連動した展開も予定しています。



【プロフィール】

パペットスンスン

6 才のパペット。

日々の出来事をムービーやイラストにしている。

パペットの国<トウーホック>在住。

議題 2：番組視聴

【番組名】

『TOKYO FM 特別番組 渋谷陽一 追悼～音楽が終った後に』

2025 年 11 月 24 日（月・休） 16:00～16:50

【番組概要】

今回ご試聴頂くのは、11 月 24 日（月・休）に放送した『TOKYO FM 特別番組 渋谷陽一 追悼～音楽が終った後に』。今年 7 月に亡くなった音楽評論家・「ロッキング・オン・グループ」代表の渋谷陽一氏を偲び企画した特別番組です。

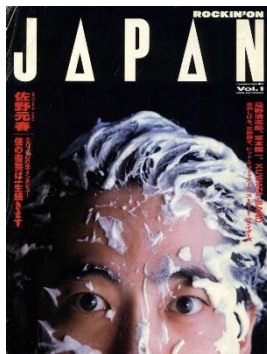
渋谷陽一氏は、1972 年に洋楽雑誌『rockin' on』を創刊、音楽批評を中心とした雑誌作りで話題を博し、その後邦楽ロック専門誌『ROCKIN' ON JAPAN』を刊行、そして 2000 年からは国内最大規模の野外音楽フェス『ROCK IN JAPAN FESTIVAL』をはじめとした音楽イベント事業に参画し、現在までに国内最大のフェスへと押し上げた第一人者です。

当社は、野外音楽フェス『ROCK IN JAPAN FESTIVAL』の主催社の 1 つとして同イベントの運営に携わり、また同氏は 1980 年代に当社でもラジオパーソナリティを務めており、その近くで哲学に触れてきました。音楽界の多大な功労者として、その功績を後世に残せればという思いから本番組を企画制作いたしました。

雑誌・イベント制作に受け継がれるその哲学を探るべく、複数の関係者にインタビューを行う形で構成しました。番組進行は、『ALL-TIME BEST』パーソナリティの LOVE が担当。現在のフェス総合プロデューサー・海津亮氏、前述 2 誌の総編集長・山崎洋一郎氏、渋谷氏とともに『rockin' on』を立ち上げた創刊メンバーの一人、橘川幸夫氏の証言からは、徹底した「聴き手（＝読者・フェス参加者）」の立場に寄り添った制作姿勢、ロック的な衝動を持ちながらも、その敗北主義を許さないポピュラー性を重んじる批評性とビジネス的嗅覚が垣間見えたほか、1986 年刊行の『ROCKIN' ON JAPAN』創刊号で表紙をつとめたシンガーソングライター・佐野元春氏のインタビューからは、ミュージシャンと批評家が織りなすロックミュージックの文化性に寄与した同氏の功績が伺えました。



▲『ROCKIN' ON JAPAN』創刊号



▲渋谷陽一氏

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○1 時間という短い時間の中で、渋谷氏が雑誌「rockin' on」を作られてから、その後、邦楽の「ROCKIN'ON JAPAN」、さらに「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」までのかなり長い変遷の時間を、ぎゅっと濃縮して語られている番組だった。私自身「ROCKIN'ON JAPAN」は高校生の頃からずっと購入して読んでいたので、渋谷氏が書いたものには親しんできたが、知らなかった時代のことや活動がどのように移り変わったのかとても興味深く聴いた。

○ラジオの音楽番組を聴いているとポップスの力、多くの人に愛される・聴かれる音楽の力をすごく実感する。渋谷氏が、ロックが好きという部分と、ポップス的などういう風に受け手に伝えていくかという部分を大事にしていたというのは、可能性と矛盾の両方を考えさせられるところがあった。

○佐野元春氏のインタビューがとても面白かった。元々、音楽でもラジオでも面白い言葉の伝え方をする人。「ROCKIN'ON JAPAN」創刊号が佐野氏だったのが意外だと話している人もいたが、ポップという部分と言葉が面白い人ということで選ばれたのかなという気もした。高校時代から「ROCKIN'ON JAPAN」をずっと読んでいたが一時期からインタビューの文体が苦手になってしまって、そこから離れてもうずっと買わなくなってしまったが、それがどういうところが苦手だったかなというのをこの番組を聴く前から少し振り返ってみたりもした。番組を聴いて思ったのは、創刊当初は本当に手作りで、個人の思いを語るというような小さい規模から始まったもの、ロック時代が反体制というか権威に対抗するというそういうイメージを持っているが、それがだんだん大きくなって権威化してきて、それはどんなジャンルでも避けられないことだが、そうするうちに、聞き手の個人的な思いが強すぎるというか、ミュージシャンと対等に話をする自分がすごい、というようなことが強く出る時期だったのかとも感じた。そしてその後に、フェスを開催するようになり、また、一般の方々も SNS で気軽に発信するようになり、今はまた開かれた方向に変わってきているのではないかと思った。

○お金の話をすごくする人だったという話があったが、事業として続けていくためにはやはりそうだろうなと思う。

○インタビューされる人が男性ばかりになっているのは、番組の構成というよりは、業界の構造の問題化と思うが、ロックや反体制というものは自由というイメージがある一方で男社会なのだと感じた。そしてそのような男性度の高い文化を好きで聴いてきた方々が、男女関わらず一定数いるのだと思う。

○渋谷氏の追悼なのに、「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」のことがその大多数を占めていたことが少し疑問だった。また、番組を聴き終わったところで続きがあるのではないかと、思って確認してしまった。関係者側から功績を聴くというオーソドックスな構成だったと思うが、物足りなかったというのが率直な感想。渋谷氏が何をやったのか、というのは彼を知っている人なら分かっていることが多いので、例えば怒りの原点や、周りの人が彼をどう理解してどう接していたかなど、亡くなったばかりの方を深掘するのがプライバシーなどあるのかもしれないが、本当はみんなそこが聴きたかったのではないかと思った。渋谷氏が書いた文章が一番彼を表していると思うので、それをピックアップするのも良かったと思う。

○渋谷氏は音楽界ではものすごい存在ではあるが、そこまで大衆性がある人ではない。とはいえコアな人たちの間ではスター。そういう方の追悼番組を、特に派手なゲストを呼ぶわけでもなく、大衆性や聴取率などと関係なく制作すること、番組として残そうとすることは TOKYO FM のメッセージなのかと感じた。他の委員から時間が短いという意見もあったが、そもそもこの枠で、この時間しか取れなかったのだと思う。

○評論家、ミュージシャンたちがこの人がどういう目で見ると常々気にするような存在の人。渋谷氏もきっと音楽業界でそういう存在だったと思う。今、批評とか批判はとても難しい時代で、「ディスる」という言葉ができたくらいから、ちょっと否定的な意見を言う「あいつディスってるぞ」というような、批評、批判、悪口が一塊になってしまった気がして、批評がしにくくなったと思う。追悼に限らず、そういう存在のことをきちんと検証しておくことは大切かと思う。

○番組審議会では追悼番組をいくつか聴いた。どれも素晴らしいが既定のフォーマットのようなものができていると感じた。追悼番組で実験的なことは難しいのかもしれないが、批評家を追悼する番組であるならば賞賛するばかりではなく、クリティカルな視点があってもいいのではないかと思う。

○『rockin'on』は私も 80 年代～90 年代に熱狂的に読んでいたので、なぜそんなに熱狂的になったのかと番組を聴きながら思い返していた。ロック批評というのが当時すごく新しかったということもある。70 年代頃まではロックスターというのは、アイドル的、神話的存在として扱うか、もしくは純粋にその音楽性だけを語るかという両極端なものだった。渋谷氏はそれをリスナー目線まで引き下げ、フラットな存在としてリスナーとミュージシャンが対等であると書いた。このことが画期的に新しかったのだと思う。それをやりすぎて 90 年代以降になるとちょっと気持ち悪いなという声や、「ロキノン厨」という言葉がネットで生まれたり、インタビューの自分語りが多いといった話も。このバランスは非常に難しかったのだと思う。先ほど別の委員から批評が難しい時代という意見が出たが、それは

確かにそうで、あることに対して客観的に批評して「これはこうで、ここが良くない」というのがすごく嫌われる。自分の立ち位置を明らかにしないで神の目線で語ることへの嫌悪感のようなものが今の時代にすごくある。それも踏まえて考えると渋谷氏の切り開いたインタビュアー側の目線でミュージシャンを見ていく手法は SNS 時代を先んじた、ある意味の先見の明があったのだと思う。

○「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」をいつからやっているのかと調べたら、2000 年から。2000 年は、まだ雑誌が全盛期で広告もたくさん入っていた時代。その数年前にフジロックが成功したというのもあると思うが、この時代に雑誌に飽き足らずフェスに乗り出したのはやはり先見の明があったのだと思う。今はもう雑誌だけで会社を維持するのは難しい時代。雑誌は単なる媒体ではなくて、その雑誌が抱えていたミュージシャンや読者、ある種の文化全体をマネジメントするもの。最近ラジオでもオールナイトニッポンが東京ドームを始めイベントに進出しているのもその一環だと思うが、一つの文化空間を支える装置に変わってきているというところもある。ロッキング・オンという老舗雑誌がフェスに乗り出したのはうまくゴール地点が見えていたというか、渋谷氏の先見の明がまたすごいなと番組を聴いて改めて思った。渋谷氏がイベントのプロではないが観客のプロだというのはまさに。以前別のところのインタビューで「ROCK IN JAPAN FESTIVAL」は他のフェスに比べてトイレの数が異様に多いと聞いた。渋谷氏がトイレ待たせたらまずいだろうとって設置したと。観客のプロとしての視点を強く感じるエピソードだった。

○番組の最後に出てくるロックは愛と平和と自由である、ラブ&ピース&フリー。本当の愛や平和は遠くの戦争ではなく、隣の人を愛せるかどうか。所詮フェスは装置であって主役は君たちです、とはまさに。素晴らしい言葉だと改めて感動した。

■大変参考になるご意見をありがとうございました。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「TOKYO FM Navi」

12 月 28 日（日）5:55～6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>